童謡，唱歌，大衆歌についての意識調査
― 中高年を中心に ―

A Survey of Preferences toward Children's Songs, Songs for School Music Classes, and Popular Songs

（2005年３月31日受理）

曽我部　司　　大橋美佐子
Tsukasa Sogabe　　Misako Ohhashi

Key words：童謡，唱歌，ナツメロ・歌謡曲，童謡と唱歌の違い

要　　旨

嬉しい時，悲しい時，歌うことはごく自然な人間精神の営みであり，音楽のはじまりの一つが歌うことであるといわれている。したがって歌うことは，創造すること以前の生活の営みに属すると考えられている。技術にこだわりすぎないで，楽しく歌いたいものである。

最近，カラオケブームの真っ只中，老若男女，マイクを片手に乗りに乗って歌っている。そこで，歌謡曲，ナツメロ，童謡，唱歌に至るまで，どのようなジャンル，どのような曲目に興味を持って歌っているのか，童謡と唱歌をどのように解釈しているのか，調査した結果を報告する。

１．調査対象

40才代～80才代までの男女

２．調査時期

平成16年７月

３．調査方法

アンケート調査による。

表１　調査人数内訳

年齢／性	40歳代～50歳代	60 歳 代	70 歳 代 以　上	合　計
男女	5	25	8	45
	（男性８人を含む）			

調査人数内訳は，表１のとおりである

好きな歌のジャンル別順位

表２　40歳代～50歳代（５人）

	１位	２位	３位	４位	５位	合計
童　謡	1	3	0	0	1	５人
唱　歌	2	1	2	0	0	５人
なつメロ 歌謡曲	2	0	1	1	0	４人
軍　歌	0	0	1	1	2	４人
民　謡	0	1	0	2	1	４人
合　計	５人	５人	４人	４人	４人	22人

40才代～50才代では，表２の通りで唱歌となつメロ歌謡曲が同人数で１位を占めていて，次いで童謡の３人である。軍歌，民謡は人気がなく下位である。これを図にしてみると図１のようになる。

表３　60歳代（27人）

	１位	２位	３位	４位	５位	合計
童　謡	5	9	7	4	0	25人
唱　歌	9	11	3	1	0	24人
なつメロ歌謡曲	10	3	7	4	0	24人
軍　歌	0	0	1	6	15	22人
民　謡	0	1	6	8	7	22人
合　計	24人	24人	24人	23人	22人	117人

60歳代では，表３の通りでなつメロ歌謡曲がトップで，唱歌もほぼ同数で高い数字を示している。60歳代になっても，軍歌，民謡は好みが少ないようである。童謡，唱歌は２位で高い数字を示していて，人気の高さがうかがえる。

表４　70歳代（13人）

	１位	２位	３位	４位	５位	合計
童　謡	1	2	6	0	4	13人
唱　歌	2	5	3	3	0	13人
なつメロ歌謡曲	8	3	2	0	0	13人
軍　歌	0	1	1	5	6	13人
民　謡	2	2	1	5	3	13人
合　計	13人	13人	13人	13人	13人	65人

図１　童謡が好きな順番

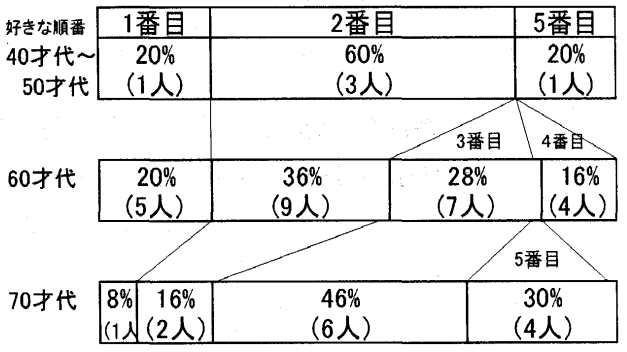

図１の通りで童謡が好きと答えた40歳代～50歳代は，２番目に最も多く60歳代，70歳代と減少している。

70歳代以上は３番目に最も多く46％を占めている。

図２　唱歌が好きな順番

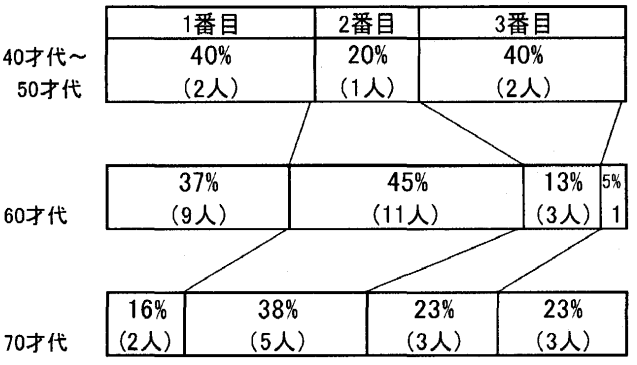

図２の通りで60歳代，70歳代以上では，２番目に唱歌が好きと答えた人が多く，やはり懐かしさが出てくるのだろうか。

図３　なつメロ・歌謡曲が好きな順番

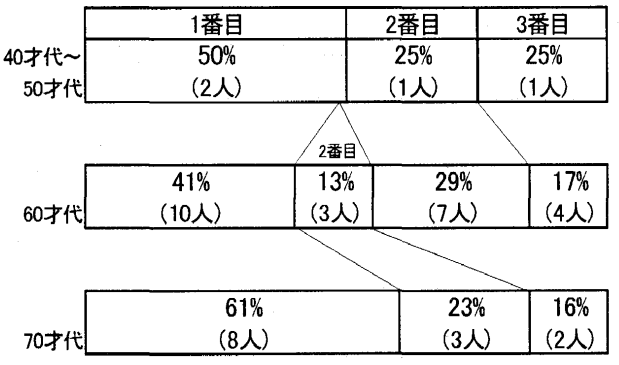

図３の通りでなつメロ歌謡曲は圧倒的に１番目を占めていて，これは，歌いやすく，なじみが深く，メディアからの流れの多さと，日常生活の中でも，なつメロ歌謡

曲は氾濫しているせいでもあろう。

図4　軍歌が好きな順番

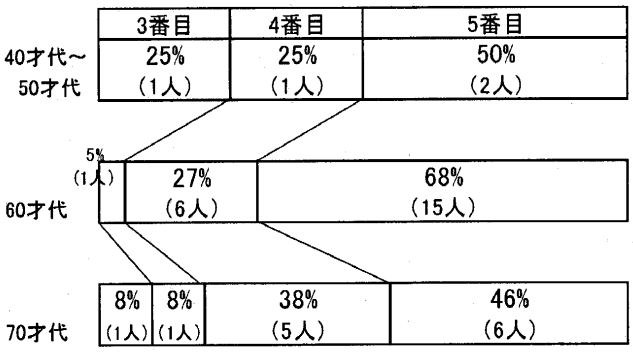

図4の通りでどの年代も順位が下位に行くほど率が増えていき，好みが減少している。戦争経験者で昔，身近に歌った軍歌ではあるが，あまり好んでいないようである。

図5　民謡が好きな順番

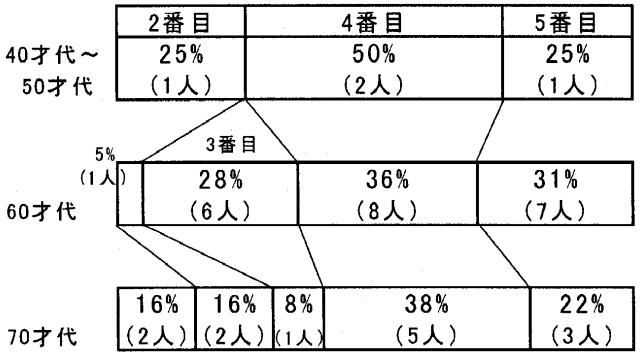

図5の通りで民謡も軍歌と同じで4番目，5番目に率が高く，あまり好まれていないようである。日常生活の中でも，あまり耳にする機会が少なく，メディア等でもあまり流れてこないためだろうか。

☆次に知っている曲（メロディー）が浮かんでくる曲を挙げてもらった結果，40歳代～50歳代では表2のとおりで1位が唱歌となつメロ歌謡曲である。実際に曲名を挙げてみると

{唱歌}

荒城の月・植生の宿・庭の千草椰子の実・ペチカ・夕焼けこやけ・桜・春がきた

{なつメロ歌謡曲}

上海帰りのリル・哀愁の町に霧が降る・リンゴ村から・青い山脈・赤と黒のブルース・りんごのうた・川の流れのように・昭和枯れすすき・真赤な太陽・りんご追分・銀座の恋の物語・別れても好きな人・北空港・ブランデーグラス・津軽海峡冬景色・天城越え・愛燦燦・お祭りマンボ・ブルーライト横浜

60歳代では表3の通りでなつメロ歌謡曲が1位である。実際に曲名を挙げてみる。

有楽町で逢いましょう・星影のワルツ・お富さん・別れの一本杉・悲しき口笛・あざみの唄・白い花の咲くころ・この世の花・おーい中村くん・リンゴ追分・東京キッド・惜別のうた・学生時代・神田川・長崎の鐘・青い山脈・岸壁の母・君の名は・古城・ここに幸あり・水色のワルツ・ゴンドラの唄・高原列車は行く・希望・影を慕いて・おさななじみ・見上げてごらん夜の星を・昴・四季の歌・からたち日記・雨降る街角・赤いランプの終列車・夜霧の第二国道・赤と黒のブルース・銀座の恋の物語・湖畔の宿・りんごの唄・川の流れのように・北国の春・夜霧よ今夜もありがとう

70歳代では表4の通りで，やはり，なつメロ歌謡曲1位を占めている。実際の曲名は次の通りである。

函館の人・学園広場・千年の古都・影を慕いて・青春時代・むらさきの雨・ああモンテンルパの夜は更けて・あざみの歌・花・川の流れのように・ここに幸あり・青い山脈・いつでも夢を・学生時代・知床旅情・瀬戸の花嫁・千曲川・みだれ髪・港が見える丘・君といつまでも・東京の花売り娘・北上夜曲・遠くへ行きたい・下町の太陽・四季の歌・水色のワルツ・長崎の鐘・岸壁の母・誰か故郷を思わざる・愛染かつら・男の一生

☆次に童謡，唱歌，なつメロ歌謡曲，軍歌，民謡のうち一番好きな歌を挙げてもらった。次に挙げてみると

〈40歳代～50歳代〉

童謡：犬のおまわりさん・みかんの花咲く丘・めだかの学校

唱歌：春の小川・春がきた・こいのぼり

なつメロ歌謡曲：ブルーライト横浜・Y. M. C. A・この広い野原いっぱい

軍歌：同期の桜・戦友

民謡：安来節・竹田の子守唄

〈60歳代〉

童謡：ぞうさん・くつがなる・あの子はだあれ・めだかの学校・雨降りお月さん・ひなまつり・かもめの水兵さん・赤い靴・みかんの花咲く丘・たき火・緑の丘・月の砂漠・七つの子

唱歌：赤とんぼ・さくら・アニーローリー・故郷・早春賦・スキー・アロハオエ・春の小川・荒城の月・谷間の灯・ローレライ・浜辺の歌・燈台守・森の小人

なつメロ歌謡曲：惜別のうた・悲しき口笛・下町の太陽・青春時代・湖畔の宿・夜霧よ今夜もありがとう・青い山脈・川の流れのように・別れのブルース・大阪しぐれ・心の窓に灯を・水色のワルツ・別れの一本杉・りんご追分・夫婦坂

軍歌：同期の桜・予科練のうた・加藤はやぶさ隊・月月火水木金金・異国の丘・戦友・露営の歌・愛国の花・麦と兵隊

民謡：こんぴらふねふね・ソーラン節・やさこい節・八木節・花笠音頭・安来節・おてもやん・黒田節・鹿児島おはら節・忠義桜・五木の子守唄・下津井節

〈70歳代〉

童謡：里の秋・揺篭のうた・ぞうさん・もしもし亀よ・夕焼けこやけ・この町この町

唱歌：背くらべ・さくら・紅葉・花・ペチカ・スキー

なつメロ歌謡曲：影を慕いて・花・川の流れのように・港が見える丘・男の人生・悲しい酒

☆では，実際童謡と唱歌はどのような違いがあるのか聞いてみた。返ってきた答えは，ほとんどが童謡は子どもが歌う歌。唱歌は学校で習って歌う歌という回答だった。筆者もその辺は曖昧であり，記載した曲も判断がつかない曲もあり，お許しいただきたい。

そこで，童謡と唱歌について述べてみることにする。日本の童謡を産み出した機関としては，鈴木三重吉の雑誌「赤い鳥」が有名であり，最初に広く歌われた作品としてそこに載った西条八十詞・成田為三曲の「かなりや」が知らされている。が，「赤い鳥」の名声はちょっと割引いて考えた方がいいようだ。今まで「赤い鳥」の評判が高かったのは童謡を論ずる人が，与田準一・サトウハチロー・・・といった詩人だったからそうなるので，今，童謡というものを作詞，作曲の総合と考えた場合には，藤田圭雄氏や小嶋美子氏のように，「赤い鳥」は必ずしも高くは買えないようだ。

八十の「かなりや」は確かにハイカラな親しみのある詩であったが，「後ろの山へ」とか「背戸の小薮」にとかいうあたりに古い民謡の殻のようなものが不調和にくっついている。成田の曲は，第一行が「ミ」で終わり，第二行が「ラ」で終わるあたり，在来の文部省唱歌に対して，親しみを感じさせていたが，全体の旋律の姿は，在来の文部省唱歌の型から大きく離れたものではなかった。ことに伴奏の部分などには，新味が感ぜられない。広く歌われたというのには，在来の唱歌の調子とよく似ていて歌いやすかったということが大きく働いたようだ。

成田は「赤い鳥」の専属作曲家として，主として北原白秋の詩「赤い鳥小鳥」「葉っぱ」などに作曲しているが，特にすぐれたものではない。洋行する直前，最後に作った「ちんちん千鳥」が一番よいが，これも近衛秀麿があとからもっとよい曲を作ったので霞んでしまった。成田のあとを襲ったのは，草川信で，この人は「夕焼け小焼け」のような，恐らく童謡中最もポピュラーな作品を作った人であった。ただし，そういう作品はいずれも他の雑誌に発表されたもので，「赤い鳥」には主に白秋のものに対して曲をつけた「南の風の」「吹雪の晩」のような作品があるが，歌詞に負け，行儀がよすぎておもしろくなかった。「赤い鳥」の童謡にほんとうに傑作が生まれたのは，白秋の詩に山田耕作が曲をつけ出したもっとあとの大正の末期である。

山田耕作は，大正中期にも少しは童謡の作曲を試みているが，本格的にこの道に乗り出してきたのは，大正末

期から昭和の初期にかけてであった。末期になっていた「赤い鳥」に載った北原白秋の詩につけた「新入生」「あの子のおうち」「この道」「すかんぽの咲く頃」など広く評判になった作品ではあるが，彼はほかにも「童謡」に発表した「かやの木山の」「かえろかえろと」「子供の村」に発表した「ペチカ」「待ちぼうけ」といったような白秋の作品に作曲している。白秋・山田のコンビは，雨情・中山・八十・本居のコンビに比べて堂々としており，健康である。中でも「あの子のおうち」今歌う人は少ないが，世の中でも第一等の作品であり，歌詞の文学性とあいまって，誇るべき日本の童謡の傑作である。

山田はこの頃，白秋のほかにも，雨情・八十・三木露風・川路柳虹の作品を全部で百曲選び，これを「山田耕作童謡百曲集」という単行本として刊行した。その詩は以前にどこかの雑誌に発表されたものなので，すでに誰かが作曲したものも多く，ここに二人以上の作曲家によって別の曲が作られたというものが多くできた。

また，これらの詩人の中で三木露風は注目すべき人で，露風の童謡作品の数は決して少なくはないが，その多くは少なくとも，歌われたものの多くは，山田の作品である。「冬」「黒ん坊さん」「光のお宮」など数ある中で「赤蜻蛉」は広く愛され，日本の代表的な子どもの歌となっている。

童謡は日本人の誇るべき文化財である。童謡はまず言葉が唱歌とちがっていた。文語文は決してなかった12語文が使われている。

子どもたちに親しい俗語が使われているのも自分たちに身近なものに感じさせた。「赤い靴」に聞かれる「異人さんにつれられて行っちゃった」という言い方。「お祭」に使われている「泣虫ゃすっ飛べ，差し上げて廻した」というような乱暴な言葉づかいは，唱歌にはおよそ出てきそうもないものだった。「葉っぱ」の「みかんの葉っぱも葉っぱっぱ」などは今だったら日本語を乱す言い方として，攻撃される言い方かもしれない。

擬声語やはやし言葉は，本来子どもの喜ぶもので，唱歌にも文部省唱歌の「虫のこえ」などに多少使われていたが，それでも「タアンキポウンキ」に見られる「タアンキポウンキタンコロリン」のようなおもしろいものは出てこなかった。「蛙の夜まわり」で「ガッコガッコガア，ハ，ピョンコピョンコピョン・・・」のような擬声語が全歌詞の半分以上をしめるというなどは，童謡ならではの観があった。雨情の「雀踊り」「南京言葉」などにも，長い擬声語が現れて楽しい。

「夕日」の「ぎんぎんぎらぎら」などは，戦後の詩人から夕日は「ぎんぎんぎらぎら」と形容すべきだと批判されたが，子どもは，残暑の日の夕方に輝く西日などは「ぎんぎんぎらぎら」と感じたので，この場合は旧派と考えられている葛原の方に理があったようだ。

童謡のこういう言葉の使い方は，唱歌に対するものよりもわらべうたに通じるものだった。事実，北原白秋などはわらべうた調のものがたくさんある。わけても「夕焼けとんぼ」などはわらべうた精神横溢の傑作である。

{唱歌とは}

「唱歌」という言葉は，きわめて日本的な言葉である。英語では「歌」も「唱歌」もともにソングで「歌」の中に特別にすれば，「唱歌」という一群の歌が明確に存在する。「唱歌」のうち代表的なものは，「尋常小学校唱歌」，つまり，明治から大正の初めにかけて文部省で編集した国定の教科書に載っていた一群の歌である。あれで代表されているように，唱歌とは学校で教わる歌である。その意味で校歌のようなものも唱歌に入る。

また，唱歌を集めた本も「尋常小学校唱歌」ばかりではない。もっと早くは，東京音楽学校が編集・刊行した「中学唱歌」というようなものもあり，「荒城の月」や「箱根八里」などは元来これに載っていた。納所弁次郎・田村虎蔵の二人が編集した「幼年少歌」というものは，民間でできたものであったが，「うさぎとかめ」とか「はなさかじじい」のようなものが載っていて，随分歌われた。また，「尋常小学校唱歌」などはたまたま日本人の作品ばかりを集めているが，もともとは外国の曲に日本人の歌詞をあてはめて唱歌と称したものもある。日本で一番早く出た唱歌集は，明治14年に伊沢修二が編集した「小学校唱歌集」である。これに出ている「蛍の光」，「庭の千草」などは代表的なものであるが，明治頃はそういうものの方が多いくらいで「明治唱歌」に載った「故郷の空」などもその例である。

もう一つの「尋常小学校唱歌」などに通じて見られる性格は，ピアノ，オルガンを伴奏楽器として歌われる洋楽系の歌だということであるが，唱歌とはみんなそういうものだと思うのは今の人の考えで，唱歌が初めてでき

た頃はそうではなかった。明治11年に京都女学校で出た「唱歌」という本は，箏を学習させるための歌詞を集めたものだったという。明治18年には東京から「ニ絃琴唱歌集」というものも出ている。邦楽が学校の音楽教育から外へ押しやられたことが原因で，このような唱歌がなくなってしまった。

それでは，唱歌の特色はどういう点にあるか。まず，歌詞について言うならば，学校で教える歌だけあって，題材はきわめてまじめで，しばしばお説教的である。明治25年に伊沢修二が編集した「小学唱歌」などはその代表で，１年生の始めに習う歌が「からすからす勘三郎」まではいいが，次が「親の恩をば忘るなよ」とある。次の「雁」は「雁々渡れ」と呼びかけてから，「大きな雁は先に，小さな雁はあとに仲良く渡れ」と言い，親に孝，目上に悌を説いている。一般に物託して教えを垂れるのが好きで，「小学唱歌集」の「庭の千草」でも，最後の結びは「人の操もかくてこそ」とある。したがって，人物を題材にする場合でも，児島高徳・菅公・広瀬・中佐・曽我兄弟・二宮金次郎といった，修身の教科書に出てくるような著名な偉人がかわるがわる取り上げられているが，やはり勤勉無比で，ひとかどの人物である。

唱歌はこのように知識を与える目的があるために，物語を題材とする場合でも，その全編を歌い込もうとする。そのためにとにかく情性が失われる。「幼年唱歌」に出た「モモタロウ」は生まれてから鬼が島から凱旋したところまでをつづっており，「尋常小学唱歌」の「牛若丸」は五条大橋での一部始終を物語る。「一寸法師」は「モモタロウ」と同じ伝であり「おおえやま」は「牛若丸」と同じ流儀せある。

そういう堅苦しい歌詞にまじって，叙景の歌や生活を歌った歌があるが，これにはなかなかいいものがまじっている。「尋常小学唱歌」の中で，歌詞のすぐれているものといいったら「海」「藤の花」などもいいが「冬景色」と「四季の雨」が双璧ではなかろうか。「冬景色」で簡潔に朝昼夜の天候変化を写したのは見事であり，「四季の雨」も日本文学作品の上に伝わってきた，日本人特有の美的情感を洗練された言葉で表現している。

生活を題材とした歌は，やはり唱歌ともなれば，取り上げられるのは健康な世界である。ままっ子が叱られて夕方遠くの故郷を思うようなのは童謡の世界である。

唱歌は題材とその取り扱い方が堅いことを反映して，用語も堅い。「尋常小学唱歌」に４年生くらいから「春の小川」のような文語文のものがまじっている。終戦後，小学校の音楽の教科書に再録する時にひと苦労したようであるが，明治20年に出た唱歌集は「幼稚園唱歌集」という標題にもかかわらず，すべての教材は文語文であった。「めぐれど端はなし環のごとくに」などいくら当時の子どもといっても難しすぎたであろう。文語文は格の正しいことはけっこうであるとして，少し上級用のものになると，日本の古典はもちろんのこと，中国の古典からも取ってくるので難解をきわめた。「うつくしきわが子」を「可愛い子ども」の意に解釈するのは困難であったし，「箱根八里」の中の「一夫関に当たるや万夫も聞くなし」は，まず耳に聞いてわからない。中川一政氏の随筆に明治時代，学校で習った唱歌で，今も解しがたいものに「近衛兵」という唱歌だったが，「キューキュータルブーブーは，国家のカンジョー」というのがあり，「カンジョー」はあとになって，「干城」と解されたが，「キューキュータル云々」はいまだに不明だ。まさか，おりに入れられた豚にたとえたものであるまいとあった。これは「赳々たる武夫」で中国の詩経の句であった。

唱歌の言葉は，たとえ口語にせよ，標準語であり，あるいは文語に近い口語であった。童謡と違い，「異人さんにつれられて行っちゃった」とか「泣き虫ゃすっ飛べ。差上げて廻した」とかいう言い方は用いられなかった。

引　用　文　献

１）高橋正夫・小林望編著　幼児教育法「音楽・音楽リズム」Ｐ６
２）金田一春彦著「童謡・唱歌の世界」主婦の友Ｐ40～45　Ｐ81～83　Ｐ93　Ｐ97～100